

「臨床検査を用いた日立病態解析システムの誕生」

演者：松尾 収二（株式会社日立ハイテク ヘルスケア事業統括本部 学術顧問）

余村 求 先生（天理よろづ相談所病院 臨床検査部）

中沢 隆史（株式会社日立ハイテク）

質疑応答集

Q 手引きは誰向けのものか？

A 検査室向けとして考えている。教育として、またコミュニケーションツールとして、使用してもらえようとする考え。
臨床との関係構築については、どんなことに困っているのか、情報を蓄積していきたい。

Q リアルタイム性はどうか？患者が帰る前に報告できると良いと感じた

A 将来的にはリアルタイムで実行できるようにしていく方針である。

Q ロジックをユーザーが自由に構築できるのは良い機能。他社施設が構築したロジックのフィードバック体制はどうするのか？

A ロジックは公開予定。良いロジックはオープンにしていく予定。（同じ病態に対して）複数ロジックがあって良い。施設ごとにあてはまりの良いロジックを選択できるようにできたらと考えている。

Q（余村先生のご発表に対して）ネフローゼ症候群の評価データには初診の検体のみが含まれるのか？

A 治療中の検体も含まれる。